

ホトトギス

三月号

ホトトギス

昭和二十三年三月二十一日発行
昭和二十三年二月二十一日発行
昭和二十三年三月二十一日発行



風雅の小筥（六十一）

廣太郎

考えてみると、大正十二年（一九二三）にホトトギス発行所が丸ビルに移転してから、今この稿を認めている令和四年（二〇二二）で丸百年が過ぎた事になる。勿論その前二十五年程の歴史もあるのだが、一般的なオフィスという意味ではこの百年は一つの起録であろう。そしてこの百年の間にこのオフィスを訪れた方はどのくらい居られるのだろう。今でもこの話は聞くが、何かホトトギス社を訪れるのは何か「恐れ多い」という事であるのが昔から言われている事で、嘘か本当かは判らないが、一つの逸話として、虚子が現役の時代、それ程交通も発達していなかった時代地方から上京されたホトトギスの読者が、是非丸ビルのホトトギス発行所を訪ねたいと、意を決して丸ビルのドアの前まで来られたが、この中に虚子が居ると思うと足が竦み、とうとう中には入れずに踵を返された、というのだ。他にもそんな方が居られるという話を聞き、とても残念に思うのだが、そんな方でも「ホトトギス社」と書かれたドアは御覧になつていないのではないかと思う。これは虚子の筆跡であり、丸ビルに発行所を構える時にドアのガラスに嵌る大きさの半紙に書き、それを丸ビルの看板を書く職人がガラスに裏から貼り付けてペンキでそれをなぞり、そのままそれがホトトギス社の看板としてドアに描かれた形となつたのである。

実は現在では製造していないが、ホトトギス社の句帳の表紙に印刷されている「ホトトギス」の文字こそがこのドアに書かれていた虚子の筆跡そのものなのである。お持ちの方は一度お確かめになられると良いだろう。

旬日記 廣太郎

令和四年三月三日 蕉心会通信句会

十六時 四十八分 冴返る
棺守る 雛の目差ありにけり
レクイエム奏でつつ 蟻穴を出づ
涅槃 西風 帰天 誘ふものとして
鶴 帰る 大いなる 人伴ひて
暖かき 司教の 祈り 葬儀ミサ
北窓を開きて 君を送りけり
これよりは 天国といふ 野に遊ぶ
この土手で 土筆を 摘みし 思ひ出も
これよりの 俳諧 思ひ木の 実植う

二月五日 芦屋ホトギス会

暖かき 日差 集め 出棺す
魂を 神に 委ねて 鶴 帰る

三月六日 野分会 芦屋例会 行子追悼句会

永き日の 句座 思ひ出を 語りつつ
潤みたる 次郎 左衛門 雛の目
蟻穴を 出づれば 主亡き 館

三月六日 青嵐会 芦屋例会

物芽出づ 召されし 魂を追ふやうに
ものの芽や 地球は み出す 勢ひもて
落第をして 人生を 豊かにす

天国の門を開きて 物芽出づ

三月七日 カトリック新聞選者吟

春灯に 潤む 遺影や 葬儀ミサ

三月八日 大阪倶楽部

主守る 次郎 左衛門 雛の 黙
天に 星地に 水温む 騒きかな
水温む 大地 蠢くもの 数多
雛の目に 守られ 棺に 納まりぬ
春の雪 偲ぶ 心を 染め上げて
天国に 近付きたくて 物芽出づ
地虫出づ 遺影の 笑みに 誘はれ

三月十四日 土筆会選者吟

一を知り 十を 忘れて 卒業す
レクイエムて 人生の 卒業歌
喪心に 摘めば 土筆の 供華となる
土筆野に 佇ちて 天国 近付ける
忘れ 雪 忘れられざる 悌も
聖堂を 出づれば 雪の 別れかな
落第をするのは 君に 会へるから

三月十四日 工業倶楽部選者吟

春雷を 聞くより 母の 訃音かな
若鮎に 水は 硬さを 解かざる
ものの芽や 世代 交代て 運命

春雷にかき消されたる鼓動かな
若鮎の未来大河に寄り添うて
物芽出づ庭は手入をされぬまま

三月十五日 有恒俳句会選者吟

春の雪 五山の夕べ彩れり
夜の厨 蜺祈りの声かとも
春の雪 都心の朝を奪ひゆく
青々と 蜺開いてより香る
淡雪に 天の消息聞かまほし

三月十六日 北國文芸選者吟

遺されし 雛に 遺影の微笑めり

三月十七日 登高会

啓蟄や 騒く 閑東ローム層
名草の芽 風知る丈となりゆけり
地虫出づ 人間界は 姦しく
低く飛ぶ 燕は 雨意を纏ひつつ
主亡き 庭の彩り 名草の芽
蟻穴を出づ 邸宅は 閉ざされて
乱舞して 乱舞して 初燕かな

三月十八日 廣邦会

送る人 送らるる人 水温む
天上の 国賑やかに 水温む
荳立や 命を神に 委ねたる

三月二十一日 若水句会

母子草母が教へてくれしこと
母子草二人の母を送りもし

三月二十三日 目黒学園句会

燕来る 主は 永久に 旅立てり
その中に 猫も 侍りて 磯開
蘆の角 空気の分子 突き刺して
天国に 近く角 組む 蘆となる

三月二十四日 徳源寺句会

雛飾る 天寿 全うせし 人に
出棺の 一步に 物芽出づる 館
主亡き 庭ものの 芽のレクイエム

三月二十七日 野分会東京例会

卒業や 天国の 門開かれし
鮎子に 走り出したる 魚の 棚

三月二十七日 青嵐会東京例会選者吟

天国は 遠くて 近し 朧月
悲しみは 祈りとなりて 物芽出づ
三月二十七日 の忌は未来へと

春雨に その日を 遠くしてをりぬ
春泥に 躓くことも なく 明日へ

三月三十日 カトリック新聞選者吟

召されゆく 魂見送りて 物芽出づ

雑詠

廣太郎 選

悲しみを半分にする今日の月 横浜 小川みゆき
 飽きるほど一人の時間月今宵 同
 呆気なく金風に乗り消え去りぬ 同
 汀子忌と印刷されて初暦 岡山 伴 明子
 その事実諾へぬまま秋の逝く 同
 きらきらと露きらきらとT先生 同
 うそ寒や一喜一憂する検査 大阪 友井正明
 汀子師の墓前に行けず惜む秋 同
 汀子師の笑顔忘れぬ秋の行く 同
 一門の結束誓ひ冬ぬくし 淡路島 木下圭子
 これ程に師を恋ふ一門冬薔薇 同
 山茶花や汀子と夢に逢ふ人も 同
 汀子晴てふ秋麗の偲ぶ会 龍ヶ崎 今橋眞理子
 ひんやりと花柵の匂ふ朝 同
 落葉舞ふ静けさを積み重ねつつ 同
 語らざる墓標語らひ合ふ小鳥 大阪 酒井湧水
 焼米を頬張り挑む高き峰 同
 俳聖の句碑に擦り寄る猫の秋 同

野の心松虫草に託せし師 米子 中村囊介
 半島に触れては返す花芒 同
 鶴鴿の声の二三歩前を行く 同
 山鳴つてわづかな時雨こぼすのみ 東京 田丸千種
 洛中へ虹を落とせし時雨かな 同
 虚子塔へ供華の代はりのひとしぐれ 同
 天国の入口水平線小春 奈良 古賀しぐれ
 冬麗の海冬麗の天に果つ 同
 海濡れてをり人工島しぐれをり 同
 濡れ髪の方に夜寒の触れてぬし 神戸 和田華凜
 灘五郷西へ東へ新酒の香 同
 天国を旅して来しか帰り花 同
 流灯の君に似合へるネオン映ゆ 徳島 岩田公次
 目の前を過ぐ流灯のをさなき字 同
 上つ闇より流灯の一次次と 同
 小鳥来る子の工作の巣箱にも 神戸 玉手のり子
 愛らしく鳴いて笑はぬ小鳥の眼 同
 小鳥来るたとへ一樹の倒るるも 同
 百の窓百の光に冬日和 同
 冬晴の空をひつばる鳶の声 同 涌羅由美
 冬晴にひと休みする風見鶏 同
 はや着きし朝寒残る峰の寺 長岡 安原 葉
 秋惜みつつ峰寺を辞す夕 同
 師在さず水音も小さき庭の秋 同

雑詠句評（二月号より）

句碑拝し修す一人の年尾の忌 長岡 安原 葉

私の印象としては、年尾先生は威厳があまりで近づきたい雰囲気があったが、ひじょうに地味で質素で、もの静かなお方であった。そんな先生をお偲びして忌を修するには、句碑を一人で拝してというのが、まことに似つかわしいように感じられ、納得できる一句である。（純也）

新型コロナウイルスの蔓延で、ホトトギスの色々な行事が中止となり、年尾忌も行われていない。そんな中でも年尾句碑の前で忌日を御一人で修しておられるのである。先師に対する深い信頼と愛情がなせる業である。（廣太郎）

一葉落つ人工島の風の音 西宮 本郷桂子

人工島の無機質な風。そんな風が吹く中にも秋は確かにやって

来るのである。秋を告げる一葉の乾いた音が聞こえてくるようだ。たとえ人工的なものであっても、四時の季節の中にあり、自然の一部なのである。最初は草木もない人工島もやがては自然に取り込まれていくのだろう。（紀子）

日本には昔から埋立地はあったようだが、比較的新しく埋め立てられた人工島なのであろう。桐の木も植えられていて、そこから落ちる一葉で季節を感じてもらえるのである。人工と自然の見事な調和が描き出されている。（廣太郎）

今年また風よく抜けて生美市 東京 阪西敦子

八王子やあきる野などにも生姜市はあるようだが、芝大神宮のそれが有名である。

境内や参道で盛んに生姜が売られているため、その名があると言われる。境内でぶら下がっているのもあるが、買って帰る人が、ぶらぶらと持ち歩いていると、ぶんぶんとあちらこちらから叩いてくる。

風がよく抜けることで、その方向から特によく生姜の匂いが運ばれてくるのでしよう。風を詠み込むことで、生姜市の風景を見事に伝えている。（雅）

生姜市が行われているのは芝大門近くの芝大神宮という神社で、奇しくも東京都港区芝公園の汀子から筆者に移った「花鳥諷詠塾」からも程近い。其処の句会の帰りだろうか。この頃の新涼の風が想像出来心地良い。(廣太郎)

草も木もなびく力を持ちて処暑 洪川 木暮陶句郎

一年一年暑さが厳しくなつて来ている。今年もようやく暑さが和らいだと思えたのは十月に入つてしばらくしてからのことだった。

暑さが収まる頃になると、人は安堵し、草木はどことなく軽やかに吹かれやすくなる。

作者は、吹かれて靡きやすくなったところに草木の生命力を見て取つたのであろう。

作者の繊細な感覚と身近な自然への観察によつて生まれた一句と思う。(しげ人)

令和四年の処暑は陰曆七月二十六日、陽曆では八月二十三日であつた。まだまだ残暑が厳しい中で、少しずつ秋の気配も感じる事が出来たのも記憶にある。そんな自然の営みを草木のなびく力で表現したところが秀逸である。(廣太郎)

残菊になほ明日の風明日の色 神戸 藤井啓子

残菊を目の前にして、明日も風の試練が待ちうけているであろうが、それに負けず、美しい色合いを保ち、咲いていることであろう、と思いをめぐらせている、というふうに解釈させていた。(公次)

菊の節句の行事の後の菊であり、盛りを過ぎてはいるが、まだまだ勢いが衰えていないものもあるだろう。残菊にはなつても色は保つていたのである。残菊に対してエールを送っている作者の気持が明るく伝わってくる。(廣太郎)

目に見えぬものの確かさ秋の声 袋井 湖東紀子

秋は空気が澄み、遠くの物音がよく聞こえる。何かしら秋と実感できる空気の気配を「秋の声」という。俳人は季節の移ろいに敏感である。目にはさやかに見えねども……の表現の如く、確かに秋を感じさせるなにかを感じている作者なのだ。(しぐれ)

秋の声というのは、はっきりと耳に聞こえるというものではないと歳時記にはあるが、やはり心のどこかで確かな音として認識しているものもあるだろう。何か超自然的なものを感じさせるような神秘さが窺える。(廣太郎)